

二〇二一年度

和歌山信愛中学校

入学試験 A日程（午前）

国語（六〇分 一〇〇点）

受験上の注意

- 一 この問題冊子は1ページから21ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。
（解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

受験番号

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、⑤～⑧の——線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 遊覧船で湖を一周する。
- ② 勇んで出かけて行った。
- ③ 『こころ』を読破する。
- ④ 思案をめぐらす。
- ⑤ 時間をあけて電話しよう。
- ⑥ 葉のふくさよう。
- ⑦ 害虫をたいじする。
- ⑧ 児童会の制度をさっしんする。

問二 次の①～③は上下の関係が類義語になるように、また④～⑥は上下の関係が対義語になるようにします。□に当てはまるものを、後の□の中から選び、漢字に直して書きなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

- | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| ⑥ | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 権利 | 寒冷 | 悪意 | 分野 | 着任 | 留守 |
| ⇕ | ⇕ | ⇕ | | | |
| □ | 温 | □ | 領 | □ | 不 |
| 務 | □ | 意 | □ | 任 | □ |

だん いき ぎ さい ぜん しゅう

問三 和子さん、信子さん、愛子さんのクラスは、ある工場に見学に行きました。学校にもどってから、来週の報告会で発表するために、見学時に書いたメモを見ながら話し合っています。次の会話文の「A」～「C」に当てはまる言葉をメモや会話文からぬき出して答えなさい。

- 1955年
- 5万つぼ
- 350人
- かん境への取り組み
- 二酸化炭素さく減

信子さんのメモ

信子：

「そうだった。では、まず工場の広さについて、次に「C」について、最後にかん境へのさまざまな取り組みについて、この三つについてくわしく報告することにしましょう。」

和子：

「ちょっと待って。せっかくなかがった大切なお話が、まだ残っているよ。」

信子：

「では、報告することが決まったね。」

愛子：

「具体的でわかりやすいね。私は、一時間に一万個も製品が仕上がるオートメーションの速さのことも言いたいな。」

- イメージキャラクターの名前を
ぼしゅう中
- オートメーション
- 1時間で1万個
- 清潔

愛子さんのメモ

和子：

「工場の歴史やさまざまな取り組みについて教えてもらって、とつてもためになったね。」

信子：

「来週の発表の持ち時間は三分以内だから、簡潔に伝えないといけないよ。」

愛子：

「工場には人がほとんどいなくて、大部分が機械化されていたね。」

信子：

「すごく広くてびっくりしたから、広さのことを言いたいな。」

和子：

「そうだね。でも、広さが「A」って言われてもピンとこないな。だから、みんなのよく知っているもので表現したらどうだろう。たとえば、この小学校五個分です、というふうに。」

会話文

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

見ている世界は知覚の枠組みだけで決まるわけではない。① 感覚が鋭敏だからといって、必ずしも多くのものが知覚されているとは限らない。例えば、イヌの嗅覚は人間の数千倍とも数千万倍ともいわれる。これは匂いを嗅ぎわけける細胞が、人の場合は約五百万個なのに対して、イヌは約二億五千万個もあるためである。しかし、イヌはその鋭い嗅覚で常にあらゆる匂いを感知しているわけではない。関心のある匂いには集中するが、そうでない匂いは無視しているからである。

これは人間も同じである。同じ視覚の構造をもつ人間であっても、文化や時代によって見える風景が違うのは、どこに関心をおいてイメージをつくるかが異なるためである。身近な例でいえば、町を歩いている若い女の子たちは中年男性など見ていないし、若い男性は女の子ばかり見ていて、その他のものは目に入っていないかもしれない。別々の年齢の人たちが同じ町を同じ時間歩いて、何を見てきたかと聞けば、② それぞれ全く違う答えが返ってくるはずである。

③ マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している。

二十世紀の前半、あるアフリカの村で、白人の衛生監視員たちが、村人たちに衛生の大切さを教える映画を見せた。上映後、監視員は、村人に「あなたたちは映画で何を見ましたか。」と尋ねた。監視員は「手を洗っているのを見ました。」とか「服をきれいにしているのを見ました。」といった反応を期待していたはずだ。A、村人から返ってきたのは「ニワトリを見ました。」という答えだった。一人だけではなく、みな同じことを言った。

監視員たちはとまどった。映画は衛生の大切さを説いたものであって、ニワトリとは関係ない。そもそもニワトリが映画に出てくるはずなどなかった。いぶかしんだ監視員が注意深く映画を見直すと、途中で、一瞬、画面の下をニワトリが横切る場面が見つかった。撮影現場のそばにいたニワトリが偶然カメラに映りこんでいたのだった。監視員たちは、この時までだれもそのことに気づいていなかった。しかし、村人たちにとって、この映画で、最も印象に残ったのが、このニワトリだった。一方、監視員たち

が伝えたかった映画の主旨^しについては、村人は全く理解していなかった。

この話は、無文字社会の人々が映画の内容を理解できないことを伝えているわけではない。人は、自分たちの文化的な文脈の中にあるものしか見えないのである。我々が映画を見てストーリーを理解できるのは、そこに使われている約束ごとを学習して理解しているからだ。

例えば、ドラマの中で男性の笑っている顔が映り、次に女性が照れている顔が映ったら、我々は説明されなくても、二人が同じ場所で見つめ合っているとわかる。それはふだんからテレビや映画を通して、そういう映像の文法に慣れ親しんでいるからである。しかし、そうした約束ごとを知らなければ、男と女の関係を結びつけては考えられない。監視員たちが上映した映画の中に、村人がニワトリしか見えなかったのは、唯一^{ゆい}、ニワトリだけが村人の生活の文法で解釈^{しゃく}できるものだったからである。

つまり、「見る」には「 I 」が必要なのだ。これは人間も動物も同じである。動物行動学者のティンバーゲンは、セグロカモメのヒナは餌^{えさ}が欲しいとき、親鳥のくちばしの先にある赤い点をつつくことを発見した。ヒナは親鳥をその全体の姿で認識^{にん}しているのではなく、くちばし状の形とその先端^{たん}にある赤い点として把握^{はあく}しているのである。それがヒナにと

って、親を認識するために先天的にプログラムされた約束ごとである。この時期のヒナには、たとえ赤い印をつけた棒であっても親鳥に見えるのである。

どうしてセグロカモメのヒナは親を全体として見ないのか。それは逆のパターンを考えればわかる。視覚に入ってくる全ての情報を分析^{せき}してから認識するとなったら、途方もない情報処理能力と時間が必要とされる。野生動物が、そんなことに時間をかけていては、自分の生存^{あや}が危ぶまれる。 **B**、いま生きる上で必要な情報だけを取り出し、わかりやすくパターン化してイメージを作りあげているのである。

セグロカモメのヒナだけでなく、人間も他の動物も、「 I 」。 II 」。というよりも、ありのままの世界は、見

たたくても見ることができないのである。ありのままの世界とは、どこにも切れ目も境界もない連続体である。それは名づけようもなければ、認識しようもないものである。

C、我々は人体を見て、ここは頭、ここは肩、ここは腕、ここは手首というふうには、それぞれの部位を認識する。それは「このあたりを腕と呼ぼう」「このへんは手首と呼ぼう」という約束ごとに基づいている。このような約束ごとをいっさい外してしまうと、どこまでが人間の体とっていいのかわからなくなる。皮膚は人間の体の境界といえるのだろうか。人間は鼻や皮膚から呼吸をしているが、その空気は体の一部ではないのか。体から発散される熱は体ではないのか。そんなふうに見ていくと、「人体」という概念も、一つの約束ごとだとわかる。こうした約束ごとを全て外してしまうと、何もかもがなくなってしまう認識のようがない。

D、^④ありのままの世界とはどのようにイメージできるのか。それは生まれたばかりの赤ん坊や、先天的に目の見えなかった人が手術で目の機能を回復して、初めて目でものを見たときに感じる世界に似ているのかもしれない。脳神経外科医のオリヴァー・サックスは、そんな患者が初めて自分の目で世界を見たときのことを書いています。そのとき患者は「何を見ているのかよくわからなかった。見ているもの全てがごちゃごちゃになっていて、意味をなさず、ぼうつとしていた。」と語ったという。

普通の人は、部屋を見れば、手前にテーブルがあり、その上に花瓶があり、その向こうに壁があり、絵がかかっている、といった関係性をすぐに把握することができる。しかし、その患者は、物や人の境界線、遠近感、関係などがわからなかった。全てがはつきりと見えているにもかかわらず、色も形も動きも全てがごちゃごちゃにしか感じられなかったのだ。脳に信号は送られていたが、脳はそれらを意味づけることはできなかった。

「見る」とは^⑤送られてきた信号を脳が意味づけることである。先の患者が体験したような、全てがつながってごちゃごちゃになっている世界に、切れ目を入れ、約束ごとやパターンをあてはめ、自分にとって理解可能なものに変換することによって、初めて「見る」ことができる。生まれつき目の見える人は、このような学習を、生まれてからずっと行い続けている。

文化や環境かんといった約束ごとに従って、目に入ってくる信号を関連づけ「世界」をつくるのが「見る」ことである。^⑥ ありのま
まの世界を、見ることはできないのである。

(田中 真知『美しいをさがす旅によう』より)

問一 —— 線部①「感覚が鋭敏だからといって、必ずしも多くのものが知覚されているとは限らない」とありますが、嗅覚きゅうが人間の数千倍とも数千万倍ともあるといわれているイヌが、人間より多くのものを知覚しているとは限らないのは、なぜですか。その理由を述べた部分を本文中から三十一字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問二 —— 線部②「それぞれ全く違う答えが返ってくる」とありますが、その理由を述べた部分を本文中から二十四字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三 —— 線部③「マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している」とありますが、筆者がこの話で述べたかったのは、どのようなことですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問四 本文中の A く D に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
ただし、同じものを二度選んではいけません。

ア だから イ 例えば ウ では エ ところが オ なぜなら

問五 本文中の「Ⅰ」に当てはまる言葉を、本文中から四字でぬき出して答えなさい。

問六 本文中の「Ⅱ」に当てはまる内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ありのままの世界や自然を、部分の総和として認識している
- イ ありのままの世界や自然を、認識したいと思っているわけではない
- ウ ありのままの世界や自然を、全体として認識しているわけではない
- エ ありのままの世界や自然を、途方もない情報処理能力により認識している
- オ ありのままの世界や自然を、わかりやすく認識してはいけないと思っている

問七 ———線部④「ありのままの世界とはどのようにイメージできるのか」とありますが、筆者は、「ありのままの世界」は「初めて目でものを見たときに感じる世界に似ている」と述べています。それは、どのような世界ですか。本文中の言葉を使って、五十文字以内で説明しなさい。

問八 ——— 線部⑤ 「送られてきた信号を脳が意味づける」とありますが、そのためには何が必要だと筆者は述べていますか。本文中の二字の言葉で答えなさい。

問九 ——— 線部⑥ 「ありのままの世界を、見ることはできないのである」とは、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どこにも切れ目も境界もない連続体である「ありのままの世界」は、至る所に存在する世界であり、人間の視覚細胞の数では、それらの全てを「見る」には限界があるということ。

イ 人間は、見たいものしか見ようとしないので、たとえ「ありのままの世界」に光があり、動きがあり、色があったとしても、目に入ることではなく、「見る」ことができないということ。

ウ 何もかもがつながってしまい認識のしようのない「ありのままの世界」を「見る」ことができるのは、特別な訓練を積み重ねて学習をくり返した人間だけであり、一般の人間にはとうてい無理であるということ。

エ 「見る」とは、目に入ってくる信号を、文化や環境に従って関連づけ「世界」をつくることであるから、認識のしようがない「ありのままの世界」は、「見る」と言うことができないということ。

オ 「見る」ためには、視覚に入ってくる全ての情報を分析して認識していかなければならず、そのためには途方もない情報処理能力と時間が必要であるため、人間の能力では「ありのままの世界」の全てを「見る」ことはできないということ。

【三】 次の文章は、将棋のプロである瀬川晶司の自伝『泣き虫しよったんの奇跡』の一節です。瀬川晶司（僕）は、子どものころからプロを目指して将棋に取り組んできました。「僕」の家の真向かいに住む同い年の「渡辺健弥」は良きライバルで、ともに近くの将棋センターに通い、「今野さん」の指導を受けてきました。中学三年生の夏、二人は全国中学生選抜将棋選手権大会に出場し、この大会では「僕」が見事優勝しました。これに続く場面を読んで、後の問いに答えなさい。

次の全国大会は、選抜選手権からわずか一週間後に行われる中学生名人戦である。

その出場を待つばかりのある日、港南台将棋センターで今野さんは、いよいよ僕たちに最終的な意思確認をした。

「おまえたち、本当に奨励会を受ける気があるんだな」

「はい」

僕は「aもbもなく返事をした。

ところが、健弥くんはこう言った。

「いえ、中学生名人戦で優勝できなかったら、僕は奨励会を受けません」

僕も今野さんも、驚いて健弥くんの顔を見た。

「どうしてだ？ いまのおまえなら合格はまちがいないぞ」

今野さんはつい本音を口走ったように思えた。今野さんの「bお墨付きを得ても、健弥くんはそれ以上は何も言わず、何を聞かれなくても黙ったままだった。

センターからの帰り道、二人だけになっても、僕たちはその話題には触れなかった。何も話さないのはいつものことだったが、この日は何か気まずかった。

優勝できなかったら奨励会を受けない。彼の性格からして、受けないといったら、c断固として受けないだろう。でもなぜなんだ？

あれほどプロになりたがっていたのに。

僕はいまさらながら、健弥くんの将棋以外のことを、ほとんど知らないのに気がついた。健弥くんの少しうしろを歩きながら、僕は①その背中を初めて見たような気がしていた。

中学生名人戦の会場は東京・千駄ヶ谷の将棋会館である。僕、健弥くん、今野さんの三人は、その日、早朝に家を出発し、新幹線に揺られていた。

すでにその前日、同じ将棋会館で予選が行われていた。そこで勝ち残った三十二人が、この日の決勝トーナメントに進むのである。僕も健弥くんも、予選は当然のようにクリアしていた。

僕たちの向かいの座席に座っている②今野さんの表情は固かった。健弥くんのことを考えているのだろうかと思った。健弥くんと僕が二人とも奨励会に入ること願って今野さんはここまで大きな犠牲を払って指導してきた。もし今日健弥くんが負ければ、その努力の半分は無駄になってしまうのだ。もちろん、健弥くんなら優勝する可能性も十分にあるのだが。

ふいにある考えがよぎった。もし今日僕と健弥くんが対戦することになったら、今野さんは心の中で健弥くんが勝つように願うのではないか。

そう願っても当然だと思った。しかし、僕たちのどちらかに肩入れするなどということは、二人にひとしく情熱を注いできた今野さんにはできないだろうとも思った。

ではこの僕は、健弥くんと当たったらどうするか……とは一瞬も考えなかった。盤をはさめば、ぶちのめす。それは A のようなものだ。

健弥くんは、ずっと窓の外を見つめたままだった。

おそろしいもので中学生名人戦の会場の僕は、一週間前と百八十度変わっていた。僕は負ける気がしなかった。今野さんの言う自信をつけるとは、こういうことなのだ実感した。

会場には、決勝トーナメントの組み合わせ表が掲げられていた。

はたして僕と健弥くんは、同じブロックに配されていた。これではともに二回勝てば、早くも準々決勝で激突することになる。それを見た今野さんは、すぐさま大会関係者のところまで走っていった。

「この子たちは同じ中学校なんです。反対のブロックにしてもらえませんか」

食ってかかるような声は、僕たちのところまで聞こえてきた。しかし、個々の都合で組み合わせが変わるわけもない。

③ 重苦しい雰囲気ふんのなか、中学生名人戦トーナメントは始まった。すでに僕たちは、この大会では頭ひとつ抜けた存在になっていたのだろう。二人ともいともあっさり和二連勝して、ともにベスト8に進出した。ついに僕たちは、準決勝進出をかけて戦うことになったのだ。

④ これまでも、県内の大会で健弥くん顔かほを合わせたことはあった。しかし、こうした大舞台で戦うのは初めてだった。気がつくと、僕たちのまわりに人が集まってきている。選抜で優勝したあの瀬川くんとライバルの大一番を観戦しようという人たちがだった。

僕の闘志はかつてないほどに燃え上がった。健弥くんの奨励会入りがどうなろうと、知ったことではなかった。絶対にこいつを倒す。頭の中にはそれだけしかなくなっていた。

しかし、対局が始まると、きょうの健弥くんがいままで一万局以上も指してきた彼とは違うのを感じた。いつもの隙あらば一気に襲いかかろうという、ぎらぎらした感じがまるでない。何か悟りきったように、淡々と指してくるのだ。

だったらこつちから潰してやる。肩に力が入っている僕は、ふだんやらないような強襲をかけた。

だが、そこにとんでもない誤算があった。僕は健弥くんの痛烈な反撃を食らい、あつというまに敗勢に陥ってしまった。

横で見っていた今野さんは、すつと席を外し、どこかへいなくなつた。それは、もう勝負がついたことを意味していた。まだ粘れる、まだ粘れる、闘志だけは燃え盛っていた僕は必死に食い下がった。だが、終盤の鬼、渡辺健弥は一分の隙もない手順で網をし

ぼり、僕の淡い希望を打ち砕いた。

「……負けました」

この相手に対し五千回は口にした言葉を、このときほど言うのがつらいと思ったことはなかった。

※投了すると僕はすぐ席を立ち、トイレに駆け込んだ。猛烈な悔しさに、涙があふれてきて止まらなかった。ぼくはそのまま、しばらく泣き続けた。

それが、僕と健弥くんの最後の真剣勝負だった。

ようやく会場に戻ると、もう健弥くんは準決勝の将棋を指していた。形勢は健弥くんにも有利に進んでいた。

ついに健弥くんは決勝まで進んだ。

あと一勝——。今野さんは、祈るような思いだったにちがいない。

決勝戦の相手は、丸山忠久くんだった。一週間前、選抜選手権で健弥くんは二回戦で丸山くんと当たり、圧倒的な大差で勝っていた。

対局が始まった。しばらくして、隣で見ている今野さんが小声で言った。

「これは選抜選手権のときとまったく同じ手順じゃないか」

大敗した丸山くんが、そのときと同じ手を指し続けているというのだ。⑤ 今野さんの表情が不安げになった。

「いける」と健弥くんは思ったのだろう、駒音が次第に高くなってきた。

しかし、それは丸山くんの待ちうけるところだった。屈辱を味わった彼はおそらくこの一週間で、対策を用意してきたのだ。

丸山くんを選手権のときとは違う一手が出た。とたんに健弥くんは長考に沈んだ。そこから形勢は丸山くんに向いていき、とうとう挽回は不可能になった。

だが、敗勢になってからの健弥くんは持ち駒をすべて自陣に打ちつけて、すさまじい抵抗を見せた。もうこの将棋を勝つ望みは

ない。だが、せめて一手でも、最後のときが来るのを遅らせたい。一分でも長く、将棋だけに熱中できる時間を過ごしたい。一手一手がそう訴えていたようだった。

しかし、ついにそのときは来た。

健弥くんは投了した。隣を見ると今野さんの目が潤んでいた。

帰りの電車で、僕たち三人はぼう然としていた。夕日が僕たちの顔を赤く照らしていた。⑥ 今日をもって、今野さんによる僕たちの育成計画はすべて終了したのだ。

僕は中学生日本一の勲章を手に入れた。おそらく、奨励会の試験も合格するだろう。港南台将棋センターに通い始めた当初、今野さんにほとんど評価されていなかった僕が、健弥くんと猛烈な競争を続けるうちに、ここまで強くなったのだ。

その健弥くんとは、別々の道を進むことになる。これからは、僕一人でプロ棋士を目指すのだ。

電車が横浜駅のホームに入った。今野さんが降りる駅だ。

「じゃ、な」

これがお別れになることを、僕たちは暗黙のうちに了解していた。僕と健弥くんは顔を見合わせ、立ち上がって今野さんにお辞儀をした。礼儀作法については、何度この人にカミナリを落とされたかわからない。

今野さんは僕たちの顔を一瞥すると、何も言わずに電車を降りていった。

ゆつくりと電車が走り始めたとき、僕はホームで腕組みをして、じつとこちらを見ている今野さんに気づいた。窓に顔を近づけると、今野さんはとたんにいつもの厳しい顔になった。電車はスピードを上げ、今野さんの姿が小さくなる。今野さんが何かを叫んだ。口の動きが「がんばれよ」と言ったように見えた。どんどん小さくなって見えなくなる寸前、今野さんは笑って手を振ったように見えたが、夕日が目に入ってよくわからなかった。

注 ※ 奨励会 … プロの棋士を養成するための特別な機関。

※ 投了 … 将棋で、一方が負けを認めて、勝負を途中で終了すること。

問一 部 a、b、c の言葉の本文中での意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「二も二もなく」

- ア あとさき考えずに
イ あれこれと言わずに
ウ ひとまず
エ 早口に
オ わきめもふらずに

b 「お墨付き」

- ア 保険
イ 保護
ウ 保身
エ 保留
オ 保証

c 「断固として」

- ア 何があんでも
イ 仕方なしには
ウ 煮えきらなくても
エ 迷いながらは
オ もたもたしても

問二——線部①「その背中を初めて見たような気がしていた」のは、なぜですか。その理由を説明したものととして最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア これまで二人そろって奨励会に入ること目標にしを削^{はず}ってきた健弥くんが、いつの間にか僕をあざむこうとたくらんでいたことに気づき、健弥くんの本心がわからなくなったから。

イ プロを目指して奨励会の試験を受けるものだとばかり思っていた健弥くんが、その受験に条件をつけた意外な答えを返してきたので、健弥くんの本心がわからなくなったから。

ウ これまでずっと将棋をがんばって、奨励会を受ければ合格できるほどの実力を身につけたのに、今さら受けたくないなどともつたいないことを言う健弥くんの本心がわからなくなったから。

エ 健弥くんが奨励会の試験を受けたというのは口先だけではないかと疑わしかったが、意外にも奨励会の受験の可能性をほのめかす答えを返してきて、健弥くんの本心がわからなくなったから。

オ これまでの言動から、絶対に奨励会の試験を受けるものだと思っていた健弥くんが、予想に反して奨励会に入りたくないと完全に否定する答えをするので、健弥くんの本心がわからなくなったから。

問三 ——— 線部② 「今野さんの表情は固かった」とありますが、「僕」から見た「今野さん」の様子を説明したものととして最も
適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 名人戦で健弥くんが優勝することを確信し、立派なプロになれると考えているようだ。
- イ 名人戦で健弥くんを応援していると見せかけて、心の底では僕を応援しているようだ。
- ウ 名人戦は健弥くんがプロになるかどうかが決まる重要な分岐点だと考え、緊張しているようだ。
- エ 名人戦で僕と健弥くんが戦うならば、できれば健弥くんの方に勝ってほしいと考えているようだ。
- オ 名人戦は僕と健弥くんの優劣を決める最終決戦だと考え、どちらもがんばってほしいと考えているようだ。

問四 本文中の A に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 本能
- イ 暴力
- ウ 友情
- エ 悪夢
- オ 憎悪ぞうお

問五 ——— 線部③ 「重苦しい雰囲気」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」と「健弥くん」はこの大会の優勝候補だからといって、大会関係者に食ってかかるような無礼なまねをする今野さんの偉えらそうな態度が悲しく、僕は重苦しい雰囲気を感じている。

イ 「僕」と「健弥くん」を反対のブロックに置くように申し入れたはずなのに、個々の都合に配慮りよしてくれない大会関係者への今野さんの怒りいかがわかり、僕は重苦しい雰囲気を感じている。

ウ 小さい頃から仲の良い「僕」と「健弥くん」が、全国大会の厳びしい舞台で勝敗を決することになるなんてかわいそうだと、今野さんの思いがわかり、僕は重苦しい雰囲気を感じている。

エ 手塩にかけて育てた「僕」と「健弥くん」が別のブロックに入ること、ともに決勝まで勝ち上がる可能性をできるだけ残したかったという今野さんの思いがわかり、僕は重苦しい雰囲気を感じている。

オ 「僕」と「健弥くん」が同じブロックに入りすぐに対戦することになるなんて、せっかく遠い全国大会まで来たことが無駄になるといふ今野さんのいらだちがわかり、僕は重苦しい雰囲気を感じている。

問六 ——— 線部④ 「これまでも、県内の大会で健弥くんと顔を合わせたことはあった。しかし、こうした大舞台で戦うのは初めてだった」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「これまで」の試合の「健弥くん」と、この「大舞台」の「健弥くん」はどのように違ちがっていると「僕」は考えていますか。その違いがはっきりとわかるように次の表にまとめるとき、Ⅰ・Ⅱに当てはまる内容はどうなりますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

「これまで」の試合の「健弥くん」	I
この「大舞台」の「健弥くん」	II

(2) この大舞台での「僕」の戦いについて説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア この大舞台に、健弥くんへの僕の闘志はかつてないほど燃え上がったが、逆にそれがあだとなり、自分の将棋を見失ってしまう。その隙を健弥くんにつけ込まれ、一気に不利となり、必死に食い下がるものの、残念ながら敗れてしまった。

イ このような大舞台での経験のない僕は、周囲からの注目を意識しすぎて肩に力が入りすぎ、ふだんと違う将棋を指してしまふ。その隙を健弥くんにつかれてしまい、あつという間に情勢は不利になり、抵抗するものあつけなく敗れてしまった。

ウ この大舞台の中で僕はすっかり緊張してしまい、健弥くんへの闘志も空回りしてしまう中で、いつもの自分とは違う将棋を指してしまう。当然、実力者の健弥くんもそのミスを見逃す^{のが}はずはなく、抵抗むなくあつさり^と敗れてしまった。

エ 中学生名人戦という最高の舞台で最高のライバルと戦うことで、僕の闘志は最高に燃え上がる。いつも通りの自分の将棋を展開するも、実力者の健弥くんを打ち負かすまではいかず、自らの力を出し切ったう^で惜しくも敗れてしまった。

オ このような大舞台だから今まで以上にいいところを見せようと、僕はこの日のためにかくし続けた裏技^{うらわざ}をくり出した。しかし、健弥くんは意外にも反撃の技を用意しており、僕は最後まで粘りに粘ったものとうとう敗れてしまった。

問七 ——— 線部⑤ 「今野さんの表情が不安げになった」とありますが、これはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア 先週健弥くんが大敗した丸山くんが、そのときと同じ手しか打ってこないことに気づかない健弥くんは、ありえないほど緊張していると気づいたから。

イ 先週健弥くんに負けてしまった丸山くんが、負けたときの手をもう一度しかけてくるのを見て、健弥くんのことをなめているのではないかと思ったから。

ウ 先週健弥くんが大敗したはずの丸山くんが、負けたときと同じ手をあえて指してくるということは、丸山くに何か策があるのではないかと気づいたから。

エ 先週健弥くんが大敗した丸山くんが、負けたときの手を完全に記憶おくしていることに驚き、健弥くんの記憶力ではとてもおよばないのではないかと感じたから。

オ 先週健弥くんに敗れたはずの丸山くんが、負けたときの手を再びくり返しているのを見て、少しも成長の見られない丸山くんに大きく失望してしまったから。

問八 —— 線部⑥「今日をもって、今野さんによる僕たちの育成計画はすべて終了したのだ」とありますが、このときの登場人

物それぞれの気持ちについてクラスで話し合いました。本文の内容を正しく読み取っている意見を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『今野さん』は、自分のもとから巣立っていく二人の教え子の活躍やぐに十分満足しています。でも、二人が巣立った後どうやって才能のある新たな弟子でしを発掘くわすればよいかと考えると、居ても立ってもいられなくなっているのです。」

イ 『健弥くん』は、大会が終わって、今野さんの厳しい指導のおかげで強くなれたことに感謝し、やはり奨励会を受けたという気持ちがいってきたのです。けれど、心変わりを責められるのではないかと思っ言い出せなくなっています。」

ウ 『僕』は、今野さんの指導を信じてがんばってきたのに、結局は二人ともこの大会では実力を発揮することができなかったから、別の先生に習っていればという悔くいを感じてしまっって、今野さんと気まづい雰囲気になっっているのです。」

エ 『今野さん』は、僕と健弥くんの二人がともに奨励会に合格するために指導をしてきたのに、二人ともふがいない結果に終わってしまったうえに、健弥くんは身勝手にもその恩を返すこともなかったから、むなしさを感じているのです。」

オ 『僕』は、今野さんの指導のもと全てを出し切った大会に敗れたことに衝撃しやうげきを受けつつも、健弥くんというライバルとの戦いの中で自分が大きく成長できたことを実感しながら、これからは一人でプロ棋士を目指すことを決意しています。」

【問題は、これで終わりです。】

受験番号

【一】

問一	問一
⑤	①
けて	②
⑥	③
⑦	んで
⑧	④

【二】

問二	問二
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥

問三	問三	問三
A	A	A
B	B	B
C	C	C

問一	問一
S	S

問二	問二
S	S

問三	問三
A	A
B	B
C	C
D	D

問四	問四
A	A
B	B
C	C
D	D

問五	問五
問六	問六

問七	問七
問八	問八
問九	問九

問八	問八
問九	問九

問一	問一
a	a
b	b
c	c
問二	問二

問三	問三
問四	問四
問五	問五

問六	問六
(1)	(1)
II	I

問七	問七
(2)	(2)

問七	問七
問八	問八

受験番号

【一】

問一	① ゆうらんせん
⑤ 空	② いさ
けて	んで
⑥ 副作用	③ どくは
⑦ 退治	④ しあん
⑧ 刷新	

問二

① 在	② 就
③ 域	④ 善
⑤ 暖	⑥ 義

問三

A 5万つぼ	B 二酸化炭素さく減	C オートメーションの速さ
--------	------------	---------------

問一

関	心
の	あ
る	る
く	て
い	る
か	ら

問二

ど	こ
に	関
心	く
異	な
る	た
め	

問三

の	人
し	は
か	、
見	自
え	分
な	た
い	ち
と	の
い	文
う	化
こ	的
と	な
。	文
	脈
	の
	中
	に
	あ
	る
	も

問四

A	エ
B	ア
C	イ
D	ウ

問五

約	束
ご	と

問六

ウ

問七

物	や	人
、	色	の
の	も	境
界	も	線
、	動	、
遠	き	遠
近	も	全
感	。	て
、	が	、
関	ご	ち
係	ち	な
な	や	ど
ど	ご	ち
が	ち	わ
わ	や	か
か	に	し
ら	し	

問八

学	習
---	---

問九

エ

問一

a	イ
b	オ
c	ア

問二

イ

問三

ウ

問四

ア

問五

エ

問六 (1)

I 隙あらば一気に襲いかかろうという、ぎらぎらした感じがある。	II 何か悟りきったように、淡々と指してくる。
------------------------------------	----------------------------

(2)

ア

問七

ウ

問八

オ

二〇二一年度

和歌山信愛中学校

入学試験 B日程

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は1ページから25ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 ー線部①～④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、ー線部⑤～⑧のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 学校で寄付をつのる。
- ② 隣の部屋で待機する。
- ③ 茶道の作法を学ぶ。
- ④ 思いやりの心を育む。
- ⑤ げんじゆうな警備。
- ⑥ 詩をろうどくする。
- ⑦ はくらんかいに出品する。
- ⑧ 銀行にお金をあずける。

問二 次の①～⑥の熟語と同じ組み立てのものを後のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ① 検温
- ② 物価
- ③ 単複
- ④ 市営
- ⑤ 均等
- ⑥ 非常

- ア 未来
- イ 人造
- ウ 求職
- エ 寒暖
- オ 美人
- カ 移動

問三 Aさんは、大地震に備えて、考えておかなければならないことをカードに書き出し、スピーチ原稿を作っていました。順番に並べていたカードを、Bさんがうっかりばらばらにしまいました。後の(1)・(2)に答えなさい。

ア そして避難所では近くの人と助け合いながら、生活するようにしましょう。

イ さらに食料や飲料、生活必需品を一人につき一週間分は備蓄しておきましょう。

ウ 地震発生後は倒壊しかかった建物には絶対に近づかないようにしましょう。

エ また家具が転倒しないように、家具を壁に固定しておきましょう。

オ 揺れを感じたら身の安全を最優先にし、机の下などに隠れましょう。

【カ】

あらかじめ、避難場所や避難経路を確認し、家族で話し合っておきましょう。

Bさん 「カードがせっかく順番に並んでいたのに、ばらばらにしまってごめんね。どんな順番に並んでいたのかなあ」

Aさん 「まずは自分が調べた情報を、地震が起こる前、地震の最中、地震が起きた後の①三種類に分類したよ」

Bさん 「なるほど。こうして分類してみると並んでいた順番がわかりそうだね」

Aさん 「②どんな順番に並んでいたか、思い出したよ。ありがとう」

(1) ——— 線部①について 【ア】 ① を三つのグループに分類しなさい。

(2) ——— 線部②について 【ア】 ② をスピーチ原稿にふさわしい順番に並べかえなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしたち植物学に関係している者が植物を語る際には、自然に生きている植物たちがどんな生き方をしているかに関心が向くのですが、世間一般では、植物とのつきあいといえば、自分たちの生活とどういう関わりがあるか、で話題にされるのが通常です。日常生活のうちで、どれだけ役に立つか、A どれだけ邪魔になるか、という筋書きです。そして、日常生活といえ

ば、食べる、着る、住むが基本です。

人が食べるという行為を考えると、これは日常生活を維持するためのエネルギーの獲得が第一の目的です。B、

人がまだ野生の動物と同じような生活をしていた太古には、生存に必要なエネルギーを獲得すればそれですとしました。そうすると、C、人は①食物を調理する文化を発展させてから、調理した軟らかい食べ物を好むようになりました。そうすると、食べ物に合わせるように顎の力が弱くなり、それに合わせた食物を人為的に育てるようになりました。文化が始まってからの長い時間の展開で見ますと、食料の安定的な供給への希求が、食料資源の人工化を促し、さらにそれが食品の状態の変化につながり、受け入れる体の構造や機能に変化をもたらす循環的な変化に展開しました。やがて、他の野生動物にはないグルメ志向など、文化としての食を育ててきました。

※ エネルギー代謝の材料の入手という点では、② 生物の世界では基礎生産者である植物が最も重要なはたらきを演じています。もちろん、植物だけでなく、その植物を食べてエネルギーを肉や脂肪のかたちで蓄えている動物たちも人の大切な食料です。人は雑食性ですが、基礎生産者の植物より肉の方が高等な食物と考える節もあります。しかし、肉の方が値段が高いといっても、光合成をすることで空気中の二酸化炭素を取り込み、他の動物のエネルギーとなる有機化合物を作り出しているのは植物であるという事は、忘れることのできない事実です。また、食物の摂り方は、純粋に個人的な嗜好だけでなく、その地域の風俗習慣、宗教などの社会的条件にも左右されます。食は文化だと言われる由縁です。

さて、③ 生き物同士の関係に関する研究においては、相互の協力関係よりも、どのように競争し、競合しあっているか、を問う方がわかりやすく、解析もしやすいようです。だから、縄張りとか食物連鎖などで関係性を整理することが多く、共生の関係などは多様な事実を※類型化するだけで、協働の意味が科学的に解析されるのは、最近まで限られた事例にとどまっていました。実際には、どのように競争し殺しあうかではなくて、どのように協働関係を作るかということが重要だったと言えるのでしょうか。

具体的に食べ物としての植物を考えれば、その内容は実に多様です。狩猟採取の生活をしてきた旧石器時代から、動物を狩り、植物を採取して人はエネルギーを獲得してきました。やがて、資源の安定供給を期待して農耕牧畜というライフスタイルに移行しますと、たとえば日本列島では、植物は主食とする五穀と、補助食品である野菜、果物、嗜好品、調味料となるスパイス類などと、飼育する動物のための飼料が整えられました。それでも、日本などでは、すべてが飼育栽培動植物でまかなわれるのではなくて、植物は主として里山で採取される野草も利用されましたし、動物は野生の中小動物が用いられる他、水産物はほとんどが野生のものを利用してきました。

食料といえば、その摂取のしかたが地域によって異なります。地域に特異な調理法が発達し、フランス料理、中華料理、エスニック料理など、地域によって特徴的に展開しています。素材を生かす味付けに、さまざまな調味料が発達し、スパイスなどの添加物が活用され、焼く、煮る、揚げる、炒める、蒸す、茹でるなど多様な調理法も開発されました。日本料理は材料となる生物がととも多いことが特徴ですが、これは日本列島の生物の多様性の豊かさを反映したものでしょう。主食だけでも、米を中心とするか、コムギを主とするか、コムギがもともども、パン食か、ナンのような調理か、麺類を多用するかさまざまですし、また、豆や芋をエネルギー源の中心として摂取する地域もあります。飼育栽培動植物は人の文化が育てたもつとも顕著な産物ですが、飼育の起源、栽培の起源がどこにあり、どのように世界中に伝わったか、人類の歴史にとってたいへん興味のある課題であり、さまざまに解析されている問題でもあります。

十五世紀末、コロンブスがヨーロッパからアメリカ大陸への航海路を確立しました。このときアメリカ大陸は世界の人びとにと

つては未開の地であり、「新世界」と呼ばれました。新世界にはそれまで他の大陸にはなかった多くの動植物が存在しました。そしてそれらの動植物は新世界から全世界に急速に拡大しました。スペインのコルドバはコロンブスがアメリカへ向けての旅に出た出発点とされますが、ここの植物園の展示室に、興味深い展示があります。今日の平均的な食卓が展示され、スイッチを押すと新世界からもたらされた食材がすべて消え去るという仕掛けです。食材も、味付けのための調味料も、一瞬にしてその食卓はとも貧相なものになってしまいます。たとえば、じゃがいもは、痩せた土地でも育つことから、世界中で広く栽培されており、今ではあちこちで地域を代表する料理の中心となっていますが、このじゃがいもも新世界が原産です。唐辛子も新世界原産です。

わたしたちが現在、地域の伝統的な料理とっているものが、歴史からみると実はそんなに古くから続いているものでないことが多いです。東アジア、東南アジアの料理には唐辛子抜きには考えられないものもあり、これらは人類の歴史のうちでは比較的近くなってこれらの地域の人たちに好まれるようになった、いわば最近流行の地域特産料理とでもいうべきものでしょう。じゃがいもが、アジアの、むしろ貧しい人たちの家庭食の中心になっているのを見ると、^④ コロンブス以前の貧しい人たちは食べるために大変困窮していたと考えられます。

^⑤ 最近の日本では食料自給率が問題にされることがあります。主食にしても、それ以外のものでも、輸入に大幅に依存しているためです。もちろん、生産量の多い国とも仲良くつきあっている問題ないのですが、もしも食料生産量の大きい国と戦争状態に入らなければならない食料の輸入が難しくなると、日本では極端な食料不足に追いやられる心配もあります。食料が安定的に輸入できなくなったからといって、戦争を起こすようなことでもあれば大変なことになります。むしろ、食料の安定供給を維持するためにも、いかに世界平和に協力していくかが最低限の外交の課題です。

量だけでなく、Xの面からは食の安全性も重要な課題です。とりわけ、食料を加工し、輸送し、貯蔵するようになって、人工的な技が加わる度合いが多くなりました。何らかの人為を加えると、自然の状態を改変し、変化を加えることは害を添えることになる危険性もともないです。とりわけ、嗜好に合う植物の大量生産のために殺虫剤等の薬剤を多用する傾向があること、加工

の過程や、長期保存のために、防腐剤などの添加物を加える機会が増えることなど、安全性を損なう可能性のある過程が増え、食の安全が脅かされる場面が出てきます。私たちの植物とのつきあいには、日常生活の中での安全性の確保のための※リテラシーの向上も期待されます。自分たち自身が自分の食の安全を維持する視点から、流通している食品の安全が維持されているかどうか、不断に状況を正確に把握する必要があります。それだけでなく、誤った情報で安全な食品への到達が難しくなるような状況に、しばしば遭遇することのある最近です。

(岩槻 邦男『新・植物とつきあう本』より)

注 ※ エネルギー代謝：体の中でエネルギーを作り出したり消費したりすること。

※ 嗜好：飲食物などの好み。

※ 類型化：共通の性質でくくって、グループ分けすること。

※ リテラシー：物事を正確に理解し、活用する能力。

問一 本文中の A C に当てはまる言葉として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから イ ところが ウ なぜなら エ あるいは

問二——線部①「食物を調理する文化」とありますが、「食物を調理する文化」によって人間はどのように変化しましたか。それを説明したものと**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は調理をすることによって、軟らかい食べ物を食べるようになった。
- イ 人間は顎の力が弱くなってしまったため、固いものを食べなくなった。
- ウ 人間は野生のものだけでなく、自分たちで食物を育てるようになった。
- エ 人間は他の動物よりも、おいしい食べ物を食べたいという欲が強くなった。
- オ 人間は食べ物の変化によって、体の構造や機能も変化した。

問三——線部②「生物の世界では基礎生産者である植物が最も重要なはたらきを演じています」とありますが、このように言えるのはなぜですか。その理由を述べた次の文の空欄に当てはまる部分を本文中から五十文字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

植物は

五十文字以内

から。

問四 ——— 線部③ 「生き物同士の関係に関する研究」とありますが、筆者は生き物同士の関係にとって何が大切だと考えていますか。本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

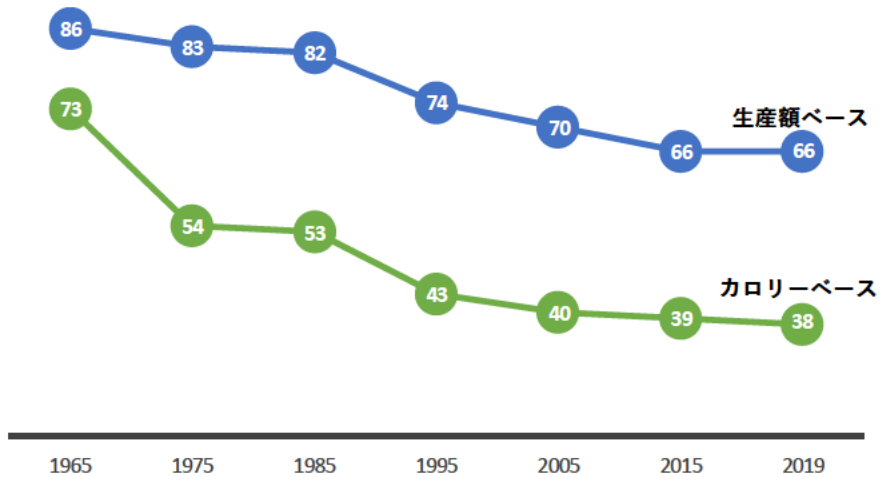
問五 ~~~~~ 線部「食料資源の人工化」とありますが、「人工化」した「食料資源」を本文では何と^か言い換えていますか。本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問六 ——— 線部④ 「コロンブス以前の貧しい人たちは食べるために大変困窮していたと考えられます」とありますが、筆者がどのように言うのはなぜですか。説明しなさい。

問七

——線部⑤「最近の日本では食料自給率が問題にされることがあります」とありますが、「食料自給率」についての次の表を見て、クラスで意見を述べ合いました。その意見のうち、**適当でないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

日本の食料自給率の推移 (単位：%)



品目ごとの食料自給率

米	97%
小麦	16%
大豆	6%
じゃがいも	68%
野菜	79%
果実	38%
肉類	52%
けいらん 鶏卵	96%
牛乳・乳製品	59%
かい 魚介類	52%
砂糖類	34%

(令和元年度 農林水産省より)

ア Aさん：日本の食料自給率はどんどん低下してきています。生産額ベースだと高く見えますが、カロリーベースだと四十パーセント以下です。このような状況はどうかしていかないといけないと思います。

イ Bさん：品目ごとの自給率を見ると、高いものと低いものがあります。その中で、日本の伝統食を作る材料は食料自給率が高いので、日本の伝統は守られているのだと思います。

ウ Cさん：日本人の主食である米は高い自給率になっています。田んぼは日本中の多くの場所にあるし、やはり日本人にとって米は欠かせないものだということが表れていると思います。

エ Dさん：米や野菜、卵などは他と比べると高い自給率になっています。私たちが日常的によく食べるものですから、この高い自給率を維持していかなければならないと思います。

オ Eさん：日本の食料自給率がこれだけ低いのに、私たちが豊富な食材を食べることができるのは、たくさんの方を海外から輸入しているからだだと思います。

問八 本文中の X に当てはまる漢字として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 質 イ 数 ウ 心 エ 体 オ 時

問九 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の食べるという行為は太古から風俗習慣や宗教に影響えいさうされており、他の動物がエネルギーの確保だけを目的にして
いるのとは根本的に異なっている。

イ 狩猟採取の生活をしてエネルギーを確保していた人間は、農耕牧畜というライフスタイルになったことで、野生のものは
利用せず、自分たちの食料は自分たちで作り出すようになった。

ウ 世界では様々な食料を様々な方法によって調理しており、調味料やスパイスなども多く活用されているが、日本では食料
の種類が少なく、調味料や調理方法なども限られている。

エ 食料として使われる植物は、もともとの原産地から移動することはないので、その土地の植物を利用することによって、
各地で特徴の異なる料理が生み出されている。

オ 人間は植物を食品として利用するために植物に手を加えて変化させてきたが、それは人間にとって害となることもあるた
め、食の安全について正しい情報を得ることが大切である。

【三】 次の文章は朝井リョウの小説『世界地図の下書き』の一節です。事故で両親を亡くした太輔（小学三年生）は、児童養護施設で生活をしています。※ ランタンに願いをこめて空に飛ばす「願いとぼし」が行われる「蛍祭り」が近づいてきたある日、太輔は学校で、「願いとぼしは家族でするものだ」「家族がいないと蛍祭りには参加できない」と、クラスメイトにからかわれてしまいます。そんな太輔を想って、同じ施設で暮らす佐緒里（中学三年生）は、太輔を誘い、一緒に蛍祭りに行く約束をしました。しかし、当日、約束の時間になっても佐緒里は現れません。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

太輔は、※ 美保子が開けっ放しにした大部屋のドアをにらむ。もう、祭りも終わった。午後七時を回ったあたりから、時計は見えない。

夕食を終えて部屋に戻ると、やがて窓の向こうで、空に飛んでいく無数のランタンが見えた。だから① すぐにカーテンを閉めた。

「佐緒里ちゃん、帰ってこんねえ」

そう言う※ 麻利は、マンガを読んでいる。※ 淳也にいろいろとちよっかいをかけている。

「そうやな。外出届でも出しとるんやない？」

② 太輔は部屋を出て、玄関へと向かった。太輔の目の高さギリギリのところ窓があつて、向こうに座っている職員と会話ができる。子どもたちはここで外出届のやりとりをする。

「あら、どうしたの」

「今日って誰か、外出届、出してる？」

えーっとねえ、とめがねをかけながら、中にいる人がパラパラと紙をめくっている。

その手が止まった。

「出してるわね、一班の佐緒里ちゃん。今日は学校を休んで、弟の病院に行ってたみたいよ。ほら、佐緒里ちゃんの弟の病院、ここからすごく遠いから……あれ、でも、今何時？」

「弟？」

その大人に、太輔の声は聞こえなかったみたいだ。「予定帰宅時刻過ぎてるわね」と、すぐに視線を外されてしまう。そのときだった。入口のドアが開いて、見慣れた制服姿が太輔に影を落とした。

「太輔くん」

開けっ放しのドアから、生暖かい真夏の空気が流れ込んでくる。走ってきたのだろうか、佐緒里の髪かみの毛はぼさぼさだ。

「太輔くんごめん、事故で電車が止まっちゃって、山奥おくで携帯けいも通じなくて連絡れんらくできなくて」

太輔は佐緒里の髪の毛の先を見つめた。

「ごめんね太輔くん、今日、私、ほんとは学校行ってなかったの。ほんとはもっと遠いところに行行って、それで」

「弟、いるんだ」

息を切らず佐緒里の肩かたが上下に震ふるえている。太輔は、ぐつと、握にぎった拳こぶしに力を込めた。

「……淳也にだって、麻利がいる。ミホちゃんにだって、お母さんがいる」

使わなかった五百円玉の分だけ、右側のポケットが重い。ランタンは、ひとつ五百円。

「おれとじゃなくなたって、お祭り、行けるじゃん。願いごと、飛ばせる」

③ 太ももをぐつ、ぐつ、と何回もつねる。佐緒里の背後、遠くの方であまのじやくなランタンがひとつ、ふたつ、空へ飛んでいくのが見えた。

枕まくらもとに、八月九日の欄らんが真っ白なままのラジオ体操出席カードがある。

何かとても悪いことをしてしまったようで、どきどきする。あくびをしながら時計を見ると、もう八時近い。パジャマのまま慌てて食堂に向かうと、いつものテーブルには太輔以外の一班のメンバーが揃っていた。

昨日の約束を破った佐緒里は、いつもどおり朝ご飯を食べている。太輔は、なぜだかそれが無性に許せなかった。

太輔が席に着いたとたん、そそくさと麻利が立ち上がった。「ね、佐緒里ちゃんいっしょにトイレ行こ」じゃあミホちゃんも一緒に行こっか、と、佐緒里が美保子の手を握る。

ゆつくりと朝ご飯を食べていたら、食堂全体の中でも最後のひとりになってしまった。大部屋に戻ったところで、誰もいない。一生口をきいてやらない、と心に決めたほどの昨日からの怒りが、一秒ごとに薄れていく。昼食の時間になってやつと姿を現したみんなは、ろくに会話せずに食事を終え、すぐに食堂からいなくなってしまった。どこに行ってしまったのかもわからない。多目的室にも、マンガがいっぱいあるとうわさの三班の部屋にもいなかった。

真夏の昼間はどこにも逃げ出せないくらいに暑い。

結局、クーラーのある大部屋から太輔はあまり出なかった。無視という形で佐緒里に仕返しをしたくても、その佐緒里がいない。淳也のマンガを勝手に借りようと思っても、どこか悪い気がして、手を出せない。だからといって、夏休みの宿題をする気にもならない。

④ 小部屋に戻り、ごろんと自分のベッドに横になる。

いつの間にか眠ってしまったらしい。ふと目を開けると、小部屋の扉の向こうから、バンバン、と何かを叩くような音が聞こえてきた。ゆつくりと上半身を起こし、二段ベッドから降りる。

小部屋から出ると、誰かが大部屋の窓を叩いている姿が見えた。もうすっかり日は暮れてしまっている。

「麻利？」

麻利のおでこがギリギリ見える。思わず窓を開けると、麻利がぴよんぴよん飛び跳ねながら言った。

「外、出てきて、こっち来て！」

早くね！ と、急かされ、太輔はその窓を開けたまま玄関へと向かった。スニーカーを履いて、外に出る。大部屋がある窓のところまで回ると、麻利がこちらに向かって大きく手招きをしていた。

「こっちこっち！」

麻利に手を握られ、走らされる。

「何、どこ行くの？」

戸惑う太輔を気に留めることもなく、麻利は迷わずにぐいぐい進む。あそこの角を曲がれば、確か、雑草に覆われたチャボの小屋があるはずだ。

蟬とカエルの鳴き声に足をすくわれそうになりながら、太輔は角を曲がった。

小屋を覆っていた雑草が、きれいになくなっている。

「おかえりなさい」

エプロンをした美保子が、真っ赤なくちびるを動かした。口紅を塗っている。雑草が取り払われた小屋の中には青いビニールシートが敷いてあり、美保子はその隅に置かれた机の上で小石や草をそれらしく並べている。

「遅かったじゃない。もうご飯、できてるわよ」

「い、ご飯できてるで、太輔」

淳也の顔には、マジックで髭が描いてある。全然似合っていない。シートの真ん中であぐらをかいて、持たされている古新聞を熟読しているふりをしている。

「ほら、家なんだからクツぬいで」

「おかえり、太輔くん。ハイ、これ太輔くんの」

佐緒里から差し出されたのは、平べったい石の上に並べられた石と細い草だった。「これがハンバーグで、これがサラダな」麻利がテキパキと説明してくれる。

針金の金網かみだけ残されたチャボの小屋は、こうしてきれいに掃除そうじされると、まるで小さな家みたくに見えた。

「これ、なに？」

「家族！」

麻利が、パツと両手を広げた。

「ミホちゃんがお母さんで、淳也くんがお父さん。私が太輔くんのお姉ちゃん、麻利ちゃんが末っ子」

座ろ、と、佐緒里がその場に腰こしを下ろす。

「昨日は本当にごめんね」

⑤ 一生口をきいてやらない、と、何度も何度も決意していた気持ちがお湯の中に入れた氷の粒つぶのように、形をなくしていく。

佐緒里は、眉まゆを下げて太輔のことを見つめている。

「家族だよ。だから、願いとばし、していいんだよ」

朝から雑草を抜き、いろんなところからいろんなものを調達し、つくりあげてくれた家。

「家族……」

あのね、と、佐緒里が話し出す。

「私、実は、太輔くんがここに来る四日前に、ここに来たばかりなの」

え、と、驚おどろいた顔をしているのは太輔だけだった。淳也も麻利も美保子も、顔色ひとつ変えずに佐緒里の話を聞いている。

「両親が離婚りこんして、弟だけ、親戚せきに引き取られたの。弟はすごく体が弱いから、入院しないとイケなくて」

私ね、と、続けて、佐緒里は一度唾を飲み込んだ。

「ひとりでこんなところに来て、どうしていいかわからなかった。そんなときに太輔くんが入ってきて……弟と同年で、同じアニメのTシャツを着てた」

太輔は、自分のTシャツの胸のあたりを見る。お母さんに買ってもらった、好きなアニメTシャツ。

「弟が近くにいるみたいで、嬉しかった。この子のお姉さんになれば寂しくなくなるって思った」

どうしてこの人はこんなにやさしいんだろう、と思っていた。やさしい人はすぐにうらぎる、と思っていた。

「ほんととは私も、太輔くんと同じくらい寂しかっただけなの。お姉さんぶって、自分の寂しさを紛らわしたかっただけ」

ごめんね、と、佐緒里は謝った。太輔は、どうして謝られているかわからなかった。

佐緒里は、スカートのポケットから白色の小さな何かを取り出した。

「ほら、ランタンの代わり」

膨らむ前の風船を顔の横に持ってくると、ね、と、佐緒里が微笑んだ。「あ、これも、これも」淳也が、銀色のスプレー缶のよ
うなものを小屋の隅っこから取ってくる。

「ヘリウムガスじゃないと、風船って飛ばないんだよ。知ってた？」

さつき覚えたのであろうヘリウムガス、という単語を、美保子は自慢げに使った。

「これ探しに行くのも大変やったんやで。うちらだけで電車乗ってな、でっかいお店行ってな、怖かったな」

「そういうことは黙っとくもんやで」

淳也が麻利の頭をばこんと叩く。

「よし。みんなで、願いとばし、やる」

「うちがふくらまず！」

麻利が佐緒里から風船を奪い、顔を真つ赤にしてふうふうと膨らまし始める。

「麻利、ヘリウムガスやないと意味ないんやって！ 何のためにガス買いに行ったんや！」淳也が風船を取り返そうと手を伸ばした瞬間、ぶふう、と大きな音がして、麻利の口から風船がすごい勢いで飛び出していった。「手え放すからや！」自由に宙を裂く風船に振り回される淳也を指さして、^⑥太輔はやつと、笑った。

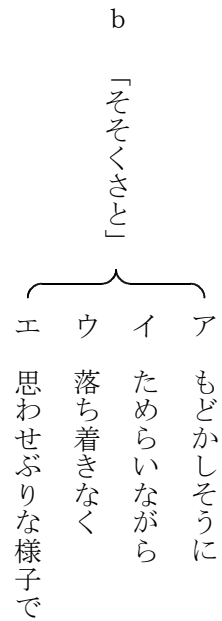
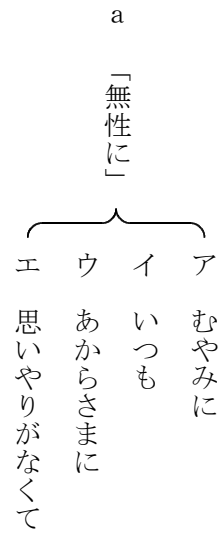
※ ランタン：紙を貼り合わせて作った袋の底で油紙を燃やして飛ばす、小型の気球。

※ 美保子：太輔と同じ施設で暮らす小学二年生。

※ 麻利：太輔と同じ施設で暮らす小学一年生。淳也の妹。

※ 淳也：太輔と同じ施設で暮らす小学三年生。麻利の兄。

問一 〓線部 a 「無性むせうに」、b 「そそくさと」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問二 〓線部① 「すぐにカーテンを閉めた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族がいなくても参加できると期待していた蛍祭りに行けず、悲しみに暮れていたが、佐緒里の事情を理解して、気持ちを切り替えようとしているから。

イ 佐緒里がいないと蛍祭りに参加することすらできない自分の状況じょうきょうに落ち込むこ一方で、その気持ちを周囲に気づかれないようにしているから。

ウ 願いとばしと一緒にする約束をしていた以上、佐緒里がいない状態で自分だけがランタンを見るのは、ぬけがけしているように申し訳ないと思っているから。

エ 蛍祭りに行くはずだった佐緒里が帰ってこないことが心配でいてもたってもいられず、落ち着いてランタンを觀賞する気持になれないでいるから。

オ 一緒に螢祭りに行く約束をしていた佐緒里が時間を過ぎても現れず、約束を破られた悔しきから、ランタンなど見たくもないと思っっているから。

問三 ー線部② 「太輔は部屋を出て、玄関へと向かった」とありますが、それは何のためですか。説明しなさい。

問四 ー線部③ 「太ももをぐっ、ぐっ、と何回もつねる」とありますが、このときの太輔の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 佐緒里が太輔のことを弟代わりとして利用して願いとばしをしようとしていたことに対して、腹を立てている。
- イ 佐緒里が必死になって戻って来てくれたのを見て、少しでも佐緒里を疑った自分の心の弱さを悔しく思っている。
- ウ 連絡もなしに帰宅予定時刻を過ぎて帰ってきた佐緒里に、裏切られた心の痛みを見せつけようとしている。
- エ 佐緒里に弟がいるのを隠されていたことを知り、自分だけが孤独である悲しみに耐えようとしている。
- オ 佐緒里が一人ぼっちの太輔をかわいそうだと思って嘘をついたことに対して、怒りを抑えきれずにいる。

問五 —— 線部④「小部屋に戻り、ごろんと自分のベッドに横になる」とありますが、このときの太輔についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんながいなくなってしまったことで、初めて仲間の大切さに気づき、これまで意地を張っていた自分を改めなければならぬと思っっている。

イ 朝からみんなが自分に対してよそよそしい態度をとっているように感じて、自分一人ではすることもなくなってしまう、時間をもてあましている。

ウ 昨日の件で佐緒里との関係がぎくしゃくしてしまい、みんなとの距離も広がってしまったように感じ、自分の態度を深く反省している。

エ 昨日から続いていた怒りが少しずつ収まるにつれて、なぜ怒っていたのかがわからなくなり、ランタンのことなどどうでもよくなっている。

オ 佐緒里だけでなく、他の仲間も自分に冷たくしていることを確信し、どういう形で仕返しすべきか、今後の自分の行動を考えている。

問六 —— 線部⑤「一生口をきいてやらない、と、何度も何度も決意していた気持ちだが、お湯の中に入れた氷の粒のように、形をなくしていく」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんなの心の温かさに触れ、素直になれず頑なだった太輔の心が少しずつほぐれていったということ。

イ きちんと謝ることができずに逃げていた佐緒里が、勇気を出して太輔に歩み寄ることができたということ。

ウ これまで冷たかったみんなの態度がやわらぎ、太輔との間のわだかまりが解けていったということ。

エ 距離を置かれていたみんなから仲間として受け入れてもらえたことに、太輔が驚いているということ。

オ 佐緒里にいらだっていた太輔が、佐緒里の謝罪を聞いて、許してやつてもいいと思えたということ。

問七

——線部⑥「太輔はやつと、笑った」とありますが、このときの太輔の様子を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 風船を取り合ったりする仲間のやりとりにあきれつつも、互いに冗談を言い合える関係がうらやましく、自分も仲間に入りたいと感じている。

イ 自分のためにみんながしてくれた心遣いがうれしく、これまでうまく出せずになっていた自分の気持ちを、自然に表現できるようになっている。

ウ 周囲を笑わせようと、わざとおどけたしぐさをする淳也の様に、笑うことの少なかった自分への気遣いを感じてうれしく思っている。

エ 佐緒里からこれまでのことを謝られたことで自分の立場が認められたように感じ、風船とぼしの失敗も許せるような気持ちになっっている。

オ 今朝からみんなが準備してきた風船とぼしを何とかすることができて不安が消え、心の底からみんななどの時間を楽しむことができている。

問八 〜〜線部「昼食の時間になって……いなくなってしまった」とありますが、それは佐緒里たちが何をしようとしていたからですか。それについて説明した次の文の [A] ・ [B] に当てはまる言葉を本文中からぬき出し、それぞれ答えなさい。

同じ施設で過ごす「[A]」として太輔を迎え入れることで、蛍祭りの日に実現できなかった [B] を一緒にやろうとしていたから。

問九 本文中に用いられている表現の特徴の説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 玄関、食堂、大部屋などの施設内の様子や、登場人物の行動をくわしく描くことで、太輔たちの生活を読者が想像しやすいように工夫している。

イ 登場人物の会話を短くテンポよくつなげたり、「……」を用いて考えながら話すシーンを作りだしたりすることで、物語の進行に変化を与えている。

ウ 回想を交えず、時間の流れに沿って物語を展開させることで、それに従って変化していく太輔の心情の揺れがより鮮明に描き出されている。

エ 主人公の太輔の視点と、他の仲間の視点からとらえた出来事を並立させることで、肉親のいない孤独な太輔の立場をより際立たせている。

オ 「バンバン」「ぴよんぴよん」「ぐいぐい」などの擬音語や擬態語を多用することで、登場人物の動作や状況がより伝わりやすくなっている。

【問題はこれで終わりです。】

【一】

問一	問一
⑤ 嚴重	① きふ
⑥ 朗読	② たいき
⑦ 博覧会	③ さほう
⑧ 預ける	④ はぐくむ

問二

① ウ	② オ	③ エ	④ イ	⑤ カ	⑥ ア
-----	-----	-----	-----	-----	-----

問三

(1) 前 イ エ カ	最中 オ	後 ア ウ
----------------------	---------	-------------

(2)

カ	↓	エ	↓	イ	↓	オ	↓	ウ	↓	ア
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

【二】

問一	問一
A エ	B ア
C イ	

問二

イ

問三 植物は 光合成をすく出して いるから。

問四

ど	の	よ	う	に	協働	関係	を	作	る	か	と	い	う	こ	と		
---	---	---	---	---	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--

問五

飼育	栽培	動物
----	----	----

問六 現在貧しい人たちの家庭食の中心となっているじやがいもは新世界から広がったもので、当時はまだなかったから。

問七

イ		問八	ア		問九	オ
---	--	----	---	--	----	---

【三】

問一	問二
a ア	b ウ
オ	

問三 佐緒里が外出届を出しているかどうか確かめるため。

問四

エ		問五	イ		問六	ア
---	--	----	---	--	----	---

問七

イ

問八

A 家族	B 願いとばし
---------	------------

問九

エ

二〇二一年度

和歌山信愛中学校

入学試験 A日程（午後）

作文（五〇分）

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙と下書き用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

問 次の文章を読んで、「学び」についてあなたが感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

「学び」のプロセスは、何らかの感情の動きをともなっている。たとえば、新しい事態を以前の「知識」で理解できないでいたときに誰かから説明を受け、なるほどそうだったのかと納得し、それを取り込んで新しい「知識」を自分の中につくるとき、その人は（小さな）感動という感情を体験するはずだ。自分で調べて発見して納得し、新しい「知識」を自前でつくりあげるときも、感情の大きな動きを体験する。やったあ！ というのに似た感情だ。だから「学び」というのは、静的で冷たい心の働きではなく、動的で情的な、人間にとってとてもうれしい営みになるはずだ。

こう考えると、私たちは日常、たえず「学び」を経験していることがわかる。ちょっとした体験から、私たちは「こういう場合は〇〇したら失敗する」というような「知識」を日頃勝手に導き出したりしているからだ。こうした場合でも「学び」がおこなわれていることになる。ただ、「学び」にはある種の感動がともなうものであるということをもまえると、同じ「学び」にも浅い深いがあると考えたほうが適切だろう。「学び」が深いほど、感動が大きい。あるいは、「学び」が深ければ深いほど、心身に新しいものが付け加わる度合いが大きく、行動までもがそれによって変化することがある、ということだ。

そうだとすると、私たちの「学び」の姿勢ということが大事な問題になってくる。「学び」は体験から新しい「知識」を導き出す営みだから、体験からどれだけ深い「知識」を導き出せるかということが、私たち自身に問われるようになるからだ。

こちらのアンテナの立て方で、ちよつとした体験からもたくさんのことを学ぶことができる。上手に生きる人というのは、小さな体験から本質的なことをも深く「学び」とれる人なのかもしれない。

(汐見 稔幸 「『学び』の場はどこにあるのか」より)

二〇二一年度

和歌山信愛中学校

入学試験 C日程

作文 (五〇分)

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙と下書き用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

問 次の文章を読んで、——線部「人を幸福にするのは『会う』よろこびなのである」ということについて、あなたが感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

「わたしたちは再び会います」

二〇二〇年四月、エリザベス女王は、※ロックダウン中の英国の人々に向けて行ったスピーチの最後に、こんな言葉を言った。これは第二次世界大戦中に英国で大流行したヴェラ・リンの歌、『We'll Meet Again』をもじったものだ。英国には、この言葉に泣かされた人が大勢いたらしい。このスピーチの後、ラジオでもテレビでも何度もこの古い曲がかかっていた。

しかし、考えてみればおかしな話だ。なぜなら、わたしたちはロックダウン中も親族や友人や同僚に会っていたはずだ。オンラインで話したり、会議したりして日常的に接触していたからだ。先日、カナダ在住の作家の西加奈子さんとオンラインで対談したときにそのことを話すと彼女はこんなことを言っていた。

「ネットで人類学者の記事を読んだんですけど、他者への信頼は、視覚と聴覚だけじゃなくて、嗅覚とか触覚とかの感覚も使って築くものらしいです。だから、こうやってネットで会うことはイコールではないみたいです」

記事のリンクを教えてもらって読んでみたら、なるほど京都大学総長の山極壽一先生がこんなことを言っていた。人間は視覚と聴覚を使って他者と会話すると脳で「つながった」と錯覚するらしいが、それだけでは信頼関係まで※担保できないという。なぜなら人は五感のすべてを使って他者を信頼するようになる生き物だからだ。そのとき、鍵になるのが、嗅覚や味覚、触覚といった、本来「共有できない感覚」だという。他者の匂い、一緒に食べる食事の味、触れる肌の感覚。こうしたものが他者との関係を築く上で重要なのだそうだ。つまり、人間はただ身体的なつながりのほうを信じているとも言える。そのうち脳のつながりだけで幸福を感じる人も出てくるかもしれないと山極先生は語っていた。しかし、まだいまのところは、人間は他者の身体を必要としているらしい。

オンラインでの「つながり」は「会う」とは違う。それを本能的に知っているから、英国の人々も女王のスピーチに涙したのだろう。どんなにテクノロジーが発達しても、いまだに人を幸福にするのは「会う」よろこびなのである。

「どこかで絶対また会いましょう」

ビデオ通話を切るたびにわたしも女王みたいなことを言っていることに気づく。

早く人々が自由に移動できるようになり、失われた幸福な瞬間が世界中に戻ってくる日を待ちながら。

(ブレイディ みかこ「幸せって何だろう」より)

※ ロックダウン：感染拡大防止などのために、都市部において、人々の外出や移動を制限すること。

※ 担保：保証すること。